

Title	曾禰好忠『毎月集』の特質について(一): 漁業関係の歌を中心に
Sub Title	
Author	金子, 英世(Kaneko, Hideyo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1998
Jtitle	三田國文 No.28 (1998. 9) ,p.1- 10
JaLC DOI	10.14991/002.19980900-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980900-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

曾禰好忠『毎月集』の特質について（一）

——漁業関係の歌を中心に——

金子 英世

はじめに

平安中期から後期にかけて成立した、百首歌を中心とする初期定数歌の作品群の中で、曾禰好忠の『毎月集』は「三百六十首和歌」というきわめて独創的な形式を有し、また内容的、表現的にも突出した個性を示している。伝記的に資料の乏しい好忠という歌人については、その歌風の形成過程など不明とされる点が多かったが、『万葉集』や漢詩文からの影響、また同時代人たち、とりわけ河原院周辺の歌人たちとの交遊が持つ重要な意味など、近年さまざまな角度から、その興味深い背景が明らかにされつつある。

そこで、それらの研究成果を踏まえ『毎月集』という作品に再び立ち返ってみると、改めて内部の読みという行為を通して検証すべき問題が浮かび上がってくるように思われる。従来『毎月集』に認められてきた「沈淪訴嘆」という性質についても、作品世界との関係やその意味するところについて、問い直すべき時期に来ていると言えよう。

稿者は『毎月集』のいくつかの特質について順次、考えを述

べて行きたいと思うが、今回は『毎月集』の漁業関係歌を中心に考察を加えることとする。

さて『毎月集』については、既に注釈として『日本古典文学大系・平安鎌倉私家集』（岩波書店・松田武夫氏校注）、『曾禰好忠集全釈』（笠間書院・神作光一氏、島田良二氏著）が明らかにされている。適宜、参照させていただきながら、論を進めたい。

尚、以下で使用する『曾禰好忠集』の本文は、古体を保つていると考えられる「書陵部蔵伝為相筆本」（『笠間影印叢刊』・笠間書院）に拠り、歌番号は『日本古典文学大系』「好忠集」のものを使用する。必要に応じて、「伝二条為氏筆本」（『天理図書館善本叢書』・八木書店）および「冷泉家時雨亭文庫蔵本」（『冷泉家時雨亭叢書・平安私家集二』・朝日新聞社）を参照することとしたい。その他の和歌については原則として本文、歌番号ともに『新編国歌大観』に拠るが、『万葉集』の歌番号については旧番号を使用する。

一 『毎月集』の作歌姿勢

『毎月集』は、各月を初・中・下に分けて各十首ずつ、つまり一日が一首に相当する形で構成されている。そして各季節の初めには、歌群の序という性格を持った長歌と反歌を置くという、非常に凝った独特の形式を有している。この長歌と反歌には、三百六十首を詠む際の好忠の心境や詠作意図などが吐露されており、『毎月集』という作品を考える上で、重要な存在となっている。

さて、秋の長歌そして冬の反歌に、好忠は次のような言葉を残している。

〔1〕涼みせし 夏の暮れにし 夕べより 野辺の草葉をかきわけて 吹き来る風の やゝ肌寒く なるままに 年月を思のほかに 過しやり かひなき身をば 心のうちに 嘆きつゝ よをなが月の すゑまでに 耳に聞ゝ 目に見ることを 記しをかば 露の命は 絶えぬとも ゆくすゑ絶えぬ 言の葉を かたみとも見よ(秋長歌・一八五)

〔2〕耳に聞き目に見ることを写しをきてゆく末の世の人にいはせん(冬反歌・二七八)

〔2〕は、四季の最後を締めくくる冬の反歌として特に注目すべきものと考えられるが、自分の歌を後世に残したいという強い思いとともに、秋の長歌と同じ言葉が繰り返されていることに注意されよう。傍線部の言葉には、自己の見聞きした事柄を記録するように詠むのだ、という好忠の作歌姿勢が表明されているように思われる。『毎月集』に詠まれている題材のすべてが好忠の実体験に基づいているとは考えにくい、少なく

とも彼の意識の中では、「耳に聞き目に見ることを写」すように詠もうという思いがあったのではなからうか。『毎月集』には、卑近な素材までも採用し、率直に詠みこなそうとする姿勢が認められるといえよう。

「具体的 即物的」とも評される好忠の歌風の一端を捉える手がかりとして、『毎月集』の漁業関係歌を中心に、以下で好忠の作歌姿勢や素材の獲得方法について考えてみたい。

二 海辺の漁業関係歌——「あま」詠——

『毎月集』には、農業や漁業などに従事する下層民を題材とした歌々がかなりの数存し、それらは『毎月集』の歌風を特徴づけるものとなっている^①。こうした素材は同時代の屏風歌などにも採り上げられているものであり、農民や漁民が働く姿は、歌枕あるいは季節の風物の一部として都人の好奇心を刺激する対象となり、屏風に描かれ、かつ歌にも詠まれたことが想像される。つまり『毎月集』の下層民詠は、都人のある種の関心の方向性と合致する一面を持っていたと考えられるのだが、好忠においてはそれが単なる好奇心の対象としてではなく、時として共感を寄せるもの、自らを投影するものとして意識されている点に注意すべきだろう。この点については、『毎月集』の詠作動機とも関わる大きな問題なので、総合的な検討の後に改めて考えることとしたい。

本稿では漁業関係歌を中心に見るが、「漁業」といえば、主として海辺で行われる漁を連想しがちではないだろうか。しかし『毎月集』においてはむしろ、海よりも川や湖周辺の漁に関

する歌の印象が強い。そしてまた川や湖の周辺を詠んだ歌にこそ、好忠の本領が発揮されているようにも思われる。

初めに、『毎月集』において海辺の漁民「あま」が、どのように詠まれているかを確認しておこう。

〔3〕須磨のあまも今は春べと知りぬらしいづくともなくなべてかすめり（正月・一四）

〔4〕小鯛釣る刈る藻のあまも春来ればうらうらごとにながめをぞする（二月中・四六）

〔5〕煙立つ春のうらうら見るときはまだ見ぬあまのありかをぞ見る（正月・四八）

〔6〕はるばるとうらうら煙立ちのぼるあまのひよりにもくづ焼くかも（正月下・五五）

『毎月集』には「あま」を詠んだ歌が四例あり、海辺の漁民を捉えた歌はこれらに尽きる。すべて春の歌として詠まれているのは、屏風歌あるいは先行する「重之百首」に倣っているものと思われる。

これら四首は「あま」の捉え方が比較的類似しており、どちらかといえば単調な詠みぶりであると感じられる。おそらくそれは、うらかな春の海辺と「あま」「塩焼き」と「あま」といった素材の組み合わせが、屏風歌などによく見られる手法を踏襲していることによるのであろう。「小鯛釣る刈る藻のあま」「ひより」など、新しい表現が取り入れられてはいるものの、後に述べる「川、湖周辺の漁業関係歌」に見られるような、具体性・現実性をこれらに窺うことはできない。

〔3〕のみが「須磨」という歌枕を伴っているが、これも「あま」との組み合わせにおいて『万葉集』以来の伝統から外れてはいない。他の三首には地名が詠み込まれておらず、総じて観念的な印象を受ける。

さらに〔4〕〔6〕は、「うらうら」に「浦々」と、明るくのかであるという意を掛ける言語趣向が共通している。これらは既に指摘されているように、次に示す「重之百首」の歌の影響下にあるものである。

春の日のうらうらごとにいでてみよなにわざしてかあまは暮らすと（重之集・百首・春・二二九）

以上のように『毎月集』の「あま」詠は、表現レベルの面白さが追求され、海辺の春の季節感やのどかさが印象的に捉えられてはいるが、素材の組み合わせや設定にそれほどの斬新さは認められない。つまり『毎月集』において海辺の漁民を詠んだ歌は、どちらかといえば具体性が希薄であり、その意味では具体的に漁民の労働を捉えた「川、湖周辺の漁業関係歌」とは、趣を異にしているといえよう。

三 川、湖周辺の漁業関係歌

次に、川や湖周辺の漁業に関する歌を見てみよう。

『毎月集』の川や湖の漁業関係歌には、築、網代、帆、引き網など、実に多彩な漁具（漁法）が詠み込まれている。またこれらの歌は、具体的な地名を伴っているものが多く、非常に写実性・現実性が高いという特色を示している。さらにこれらは、

琵琶湖周辺の漁業に係した歌で占められており、『毎月集』の中で「琵琶湖周辺詠」とでもいうべき一つの傾向を成している。それらの歌について、以下で具体的に検討を加えたい。

(一) 野洲川の築漁

(7) 野洲川の早瀬にさせるのぼり築けふのひよりにいくらつ
もれり(三月下・八八)

当該歌には「野洲川」における築漁の光景が詠まれている。

「野洲川」は近江の地、現在の滋賀県野洲郡野洲町と守山市との間を流れ琵琶湖に注ぐ川で、『万葉集』にも

a 我妹子にまたも近江のやすの川安寝も寝ずに恋ひわたる
かも(万葉・⑩三一五七) ※○内は巻数を表す。

と詠まれている。「野洲」の地はその名から、大嘗会和歌の地名としてもしばしば採用されている。康保五(九六八)年の大嘗会では野洲郡が悠紀斎田に卜定され、以後もしばしば悠紀斎田となっている。

『毎月集』にはもう一首「野洲の浦」を詠んだと思われる、
(8) 勝間田の池の水の解けしよりやすの浦とぞ鳩鳥も鳴く
(正月初・一三)

も見え、また『毎月集』に大きな影響を与えたとされる『重之百首』にも

b 近江なる野洲の入江にさす網の水をいをと今朝は見えけ
る(重之集・百首・冬・二九五)

という「野洲」の漁業を題材とした歌がある。⁸「野洲」は歌枕

としてかなりの用例を数えるが、漁業に関する歌はこの重之詠と好忠のものくらいしか見出されない。

さて、築の起源は古く、『日本書紀』神武天皇即位前紀には既に「亦築を作ちて取魚する者あり」という記述が見える。

「野洲川」の築漁がいつ頃始められたかは不明だが、中世において盛んに行われたことは、記録類などから知ることができ。好忠の歌は、平安期の築漁を伝える資料としても、貴重な意味を持つものといえよう。

(7) に詠まれている「のぼり築」とは、下流から遡行する魚類を捕らえるための築をいい、逆に上流から下行する魚類を目的とした築を「くだり築」と呼ぶ。築は春から夏にかけて設置されるので、当該歌が「三月下」に配列されていることも、築漁の実態に即しているといえよう。

築に関する歌はあまり残っておらず、以下に示す通り『万葉集』に三例存するほか、平安中期では屏風歌などに数例見えるのみである。それらについて、簡単に比較しておく。

c この夕、^{ゆふ} 柘のさ枝の、^{つみ} 流れ来ば 築は打たずて 取ら
ずかもあらむ(万葉・③三八六)

d いにしへに 築打つ人の なかりせば ここにもあらま
し 柘の枝はも(万葉・③三八七)

e あだ人の 築打ち渡す 瀬を早み 心は思へど 直に逢
はぬかも(万葉・⑪二六九九)

f 築見れば河風いたく吹く時ぞ波の花さへ落ちまさりける
(拾遺・雑春・屏風歌・一〇六一・貫之)

g 春のため打てる築にもあらなくに波の花にも落ちつもる

らん（躬恒集・屏風歌・三一六）

これらを好忠詠と比べれば、「築」の描写の具体性に大きな差があることに気づかされよう。『万葉集』のc・dは、柘の枝伝説に基づく設定、eは周囲の状況がままらないことのとたとえとして「築」が詠まれているに過ぎない。fやgといった屏風歌においては、「築」は「波の花」という見立てを効果的に表現するための場として機能しており、「築」の漁具という本来の役割にはほとんど目が向けられてはいない。

ところが好忠詠においては、「けふのひよりにいくらつもれり」といった漁況に対する関心が主題となっており、漁具としての「築」そのものに焦点を当てた詠み方となっている。「のぼり築」といった専門的用語が用いられていることにも注意されよう。ここには漁民に寄り添うような、好忠独特の視点がある。

（二）瀬田川の築漁（田上の網代）

次に瀬田川の築漁を詠んだ歌を見る。

〔9〕田上や瀬田の早瀬に築さしてよるとしなればうき寝をぞする（九月下・二七三）

「田上」は、現在の天津市田上地区に当たる。田上には瀬田川の瀬に設けられた有名な「田上の網代」があった。「田上の網代」は、早く元慶七（八八三）年の太政官符にその名が見える。それによると、近江国には田上・勢田・和邇・筑摩の四つの御厨があり、氷魚を貢上していたと知られる。「延喜式」内膳司には「山城国、近江国網代氷魚一処」とあるが、この「近

江国網代」とは「田上の網代」を指しており、これによって九月から十二月末までに三十日、氷魚を貢進することが定められていた。

「田上の網代」を詠んだ和歌には、「月影の田上川にきよければ網代に氷魚のよるも見えけり」（拾遺・雑秋・天禄四年内裏屏風歌・一一三三・元輔）がある。田上川は瀬田川の支流である。

さて〔9〕は、「九月下」という時期や場所から考えると「田上の網代」の様子を詠んでいると思しいが、好忠は「網代」という言葉を用いず、これを「築」として詠んでいる。

和歌素材としての季節感からいえば、屏風歌などにおいて「築」は春の、「網代」は冬またはまれに秋の景物とするのが一般的であり、その意味からも九月下に配列されている当該歌では「網代」として詠むのが適切であるように思われる。『毎月集』には、次に示すように「網代」を詠み込んだ歌が一首存するが、これも九月に配列されている。

〔10〕網代守る宇治の川長年つもりいくそ月日をかぞへきぬらん（九月中・二六三）

但し、「網代」と「築」という言葉は、意味上の区別なく使われる場合も多く、その差異を明らかにするのは難しい。「網代」は古くは漁具を指すものであったと思われるが、時代が下るに従って、漁場やその権利を漠然と示す用例が増える。一方、「築」は古くから、漁具や装置としての意味が強いようである。『毎月集』の例は、屏風歌的な季節感よりも、むしろ、「網代」

を漁場、「築」を漁具とする現実的な認識に基づいていると考
えるべきかもしれない。

少なくとも「田上」辺りの川瀬が築漁（網代）に適した場で
あったことは確実であり、そこで（9）に詠まれているような
漁の光景が見られたであろうことも容易に想像される。

当該歌においても好忠は、同情ともいへべき心情を寄せつつ
漁民的視点から、リアルにその生活を描き出しているといえよ
う。

ところで『毎月集』には、既に示した野洲川の築詠（7）、
瀬田川の築詠（9）のほか、地名は詠み込まれていないが、
もう一首「築」に関係した歌が存する。

〔11〕川上に夕立すらし水屑せくやな瀬のさ波声騒ぐなり（六
月上・一五七）

築の設置してある川瀬が増水するさまを詠んだものであり、
漁の様子が捉えられているわけではないが、瀬音が高くなった
ことよって上流の夕立を思うという、清新な感覚の一首である。
ただし当該歌には、次に示す『重之百首』の歌からの影響が
指摘されている。「やな瀬」の波音を詠むという趣向は、これ
に学んだものであろう。

名取川やな瀬の波ぞ騒ぐなる紅葉や寄りていとどせくらん
（重之集・百首・秋・二七五）

好忠は、『重之百首』の新趣向にいち早く注目し、それを『毎
月集』に応用したのであろう。

（三） 魼漁

次の歌は内容から、琵琶湖周辺の漁業を題材にしている可能
性が高いと考えられるものである。

〔12〕さゝみづにすがきさほせり春ごとに魼さす民のしわざな
らしも（二月初・三五）

「魼」とは、岸から直角に沖の方へ向かつて簀を並べ立て、
さらにその先端部を囲むように簀を設置して魚を誘い込む陥筈
漁具のことである。「すがき」は、「魼」を組み立てるために必
要となる、竹や葦などを編み上げた簀のことで、『毎月集』夏
の反歌にも、

〔13〕川すがき立てたる人もなき人の流れての世のしるしなり
けり（夏の反歌・九四）

※底本は初句「かみすかき」とある。他本に従う。
と詠まれている。

この魼漁は、琵琶湖を中心に行われ、発達した独特の漁法で
あり、〔12〕は、その様子を題材にしていると考えられる。従っ
て当該歌も、琵琶湖周辺の地を念頭に置いて詠まれたものだと
推量される。

「魼」は、早春に再築されるのが常であるという。この歌に
は「魼」を再築するために「すがき」を準備している光景が捉
えられているのであろう。このように魼漁を具体的に詠んだ歌
は類を見ないのであり、実際の作業を見た者でなければ知り
得ない風景を伝えているといえよう。

(四) 三尾の浦の引き網漁

次の二首について、まずその地名を検討してみたい。

〔14〕 みをの浦の引き網のつなのだくれども長きは春の一日なりけり (三月下・八七)

〔15〕 すくもやくみほの浦人舟なれていくその夏をこがれきぬらん (四月下・一二二)

『大系』、『全釈』はともに、これらの傍線部を「三保の浦」(駿河)と解している。しかしながら当時、駿河の「三保」が歌枕としてそれほど知られていたとは考えられず、これらが駿河の地名ではない可能性もあるように思われる。

また『好忠集』の伝本を代表する古写本である「伝為相筆本」
「伝為氏筆本」ではともに、〔14〕の傍線部は「みをのうら」、
〔15〕は「みほのうら」と表記されている。『大系』、『全釈』はこれらを仮名遣いの違いとして処理し、同じ場所を詠んでいると考えるが、それぞれが別の場所である可能性についても検討すべきであろう。

「みほ」「みを」の地名は各地に残るものの、好忠以前の歌枕として確認されるのは、『万葉集』に見える駿河、紀伊、近江の三ヶ所にすぎない。それらの例を次に示す。

- a 廬原の清見の崎の三保の浦のゆたけき見つつ物思ひもなし
(万葉・③二九六) ↓駿河
- b 風早の三穂の浦廻を漕ぐ舟の舟人騒く波立つらしも
(万葉・⑦一二二八) ↓紀伊

c 思ひつゝ来れど来かねて三尾の崎真長の浦をまたかへり
見つ (万葉・⑨一七三三) ↓近江

『万葉集』に、aの駿河の「三保」は一例のみ、bの紀伊の「三穂」は三例、cの近江の「三尾」は二例を数える。

〔14〕は、「みを」という表記からすれば、『万葉集』に「三尾の崎真長の浦」と詠まれている、近江の「三尾」を当てるのがふさわしいように思われる。「三尾」の地名は古く、『延喜式』や『和名抄』にも見える。この地は現在の滋賀県高島郡明神崎の辺りと考えられ、琵琶湖の西岸に位置する。その名は神楽歌にも、

d 三尾が崎 渡る隼 鳥捕らば 夫やを捕らば 瀬田やおけ (神楽歌・一〇二二)

と見えている。また付近には、

e 高島や三尾の中山袖たてゝ作りかさねよ千世のなみ蔵 (拾遺・大嘗会風俗・六〇五・不知)

と詠まれた有名な袖山があった。

後の例になるが、紫式部が越前に赴任する父に従って琵琶湖を渡る時詠んだ、次の歌が残っている。

近江のみづうみにて、みをがさきといふところに網引く
を見て

f みをのうみに網引く民のてまもなくたちちるにつけてみやこ恋しも (紫式部集・二〇〇)

この歌から、引き網漁の行われる光景は近江の「三尾」の辺りでよく見られるものであったと知られよう。

また、好忠の歌枕使用では、その名を掛詞的に用いたり、そ

の名から喚起されるイメージを利用したりする手法がよく使われている。ここでも〔14〕は、「三尾」の「尾」に「長さ」との縁語的つながりが意識されていると見る事ができよう。

以上の点からこの歌も、一連の琵琶湖周辺詠に加えてよいのではないかと考えられる。『毎月集』の琵琶湖周辺詠の多さから見て、〔14〕に近江の「三尾」を当てるのは、駿河の「三保」を詠んだ歌とするより、妥当な考えであると思われる。当該歌は序詞的に、琵琶湖の引き網漁の様子を詠み込んでいるかと見ておきたい。

〔15〕は、「みほの浦人」が巧みに舟を操る情景を題材に、「漕がる／焦がる」を掛けて、恋の意味を重ねた一首であると解せよう。ところで当該歌に詠まれている「みほ」は、どの地を詠んだと考えるべきだろうか。検討しておこう。

a k c に挙げた万葉歌との内容的類似性を見るなら、舟を漕ぐ「舟人」を詠んだbが最も近いということになる。紀伊の「三穂」は、現在の和歌山県日高郡美浜町の辺りと考えられており、『万葉集』にはつっじを詠んだ

g 風早の三穂の浦廻の白つっじ見れどもさぶし無き人思へば（万葉・③四三四）
もある。

「すくもやく」という言葉は、「津の国のなにはたまくをしみこそすくもたく火の下にこがるれ」（後撰・恋三・七六九・紀内親王）などに見える「すくもたく」に拠る表現と考えられよう（「すくも」は、海岸や湖岸などで、あまがかき集めて燃

やす葦や茅などの枯れたものや打ち上げられた水草などのことをいう）。しかしそれが特定の地名に掛かるような用例はなく、これだけでは場所を特定する手がかりとは成り得ない。

判断材料が少ないが、ここでは一応万葉歌との類似性から、〔15〕に紀伊の「三穂」を当てておくこととしたい。ただし『毎月集』では、同一の歌枕を数度にわたって詠んでいる例も少なくないので、「みほ」と表記されてはいるものの、これが〔14〕と同じ近江の「三尾」である可能性も残しておきたいと思う。

四 その他の琵琶湖周辺詠（安曇川）

漁業関係詠ではないが、『毎月集』の琵琶湖周辺の地を詠んだ歌について、併せて見ておこう。

〔19〕筏おろす安曇の早川せきとめて暮れゆく秋を見るよしもがな（九月下・二七五）

〔20〕久木生ふる安曇の川原の浅茅生も残らず霜に枯れ果てにけり（十一月初・三二四）

「安曇川」は『万葉集』に

a 高島の安曇川波は騒けども我れは家思ふ宿り悲しみ（万葉・⑨一六九〇）

という歌があるほか、小異歌が巻七に見えるのみで、平安期には好忠以外、ほとんど詠まれていない歌枕である。但し「安曇の港」という形では『万葉集』に二例見える。

「安曇川」は、丹波山地の百井峠付近に水源を発し、北東流して大津市に入り琵琶湖にまで至る、湖西第一の川である。古

来、築漁の行われた場所として有名で、また(19)に詠まれている通り古代から、上流の朽木谷で産出される良質の材木を筏に組んで流下することでも知られていた。

さて、川に「筏」を下す様子は『万葉集』にも詠まれており次に示す通り、屏風歌などにも見られる。屏風歌では、大井川の景物としてよく詠まれた。

b 筏おろす杣山川のみなれ棹さしてくれどもあはぬ君かな
(古今六帖・そま・一〇一五/小異歌、拾遺集・六三九)

大井川にいかだおろすところひとびとあり

c 筏おろし明け暮れくだす大井川みなれぞしめるよそのひ
とさへ(能宣集・屏風歌・二〇二)

大井に、いかだくです、もみぢ見る人あり

d 大井川筏の棹もさすまなく錦に見ゆる波の上かな

(惠慶法師集・屏風歌・二〇二)

好忠は『万葉集』以来、詠まれることのなかつた「安曇川」という歌枕を詠み、しかも(19)では、『万葉集』の安曇川には見られない「筏をくだす川」という形容を用いている。これには安曇川に関する好忠自身の見聞が生かされているように思われる。

(21) 杣川の筏の床の浮き枕夏は涼しきふしとなりけり(五月
初・一三二)

さらに(21)の「杣川」も、地名は示されないが、先の(19)の存在を視野に入れば、安曇川辺りの情景を詠んでいる可能性があると考えられるのではなからうか。当該歌は労働民の生

活に思いを馳せた、独創的な納涼詠であり、描写の具体性から見て、実景をヒントに発想されたものかと想像される。琵琶湖の周辺には野洲川など「杣川」として知られた河川が多いので、この歌も一連の琵琶湖周辺詠との関係を考えてよいかと思われる。

むすび

以上のように、『毎月集』の漁業関係歌は四首の「あま」詠を除くと、琵琶湖やその周辺の河川における漁業に関係しているものがほとんどを占め、それらは先行する和歌には認められない具体性、写実性を有している。漁業関係歌以外にも目を向けると『毎月集』の琵琶湖周辺詠はかなりの数に上り、これらの歌は下層民の労働、または労働の場を題材としているものが多い。しかもそれらには、当地における好忠の見聞に基づいていると考えざるを得ない特色が表れているといえよう。

こうした事実は、ある時期(おそらくは好忠が丹後掾を辞した後から『毎月集』を成すまでの間であろう)、好忠の生活圏が近江の周辺にあったことを想像させる。近江は京都から比較的近く、源順も無官の折、「野洲の郡」に住んだという¹²⁾。しかしこの点についての速断は避けるべきであろう。好忠の動向に関しては、漁業関係歌以外の要素も併せて尚、検討を続けたい。

『毎月集』は、様々な形で先行文芸の影響を受けているが、同時に好忠自身の作歌姿勢や素材選択力によって獲得されたものも大きいのではないかと考えられる。『毎月集』の琵琶湖周

辺詠には、そうした好忠の独創性が遺憾なく發揮されているといえよう。

註

- (1) 尚、以下の本文中では「日本古典文学大系・平安鎌倉私家集」は「大系」、「曾禰好忠集全釈」は「全釈」の略称を用いる。
- (2) 「大系」は、この部分は古今集序の「心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり」によっているか、と指摘する。「耳に聞き 目に見ることを」の表現は、あるいは次の「万葉集」の長歌に発想を得たかとも想像されるものであろう。
時ごとに いやめづらしく八千種に 草木花咲き 鳴く鳥の 声も変らふ 耳に聞き 目に見ることに うち嘆き 萎えうらぶれ 偲ひつつ 争ふはしに 木の暗の 四月したたば夜隠りに 鳴くほととぎす ……(後略)
(万葉・⑩四一六六・大伴家持／詠霍公鳥并時花歌一首)
- (3) 滝沢貞夫氏「曾禰好忠試論」(『国文学 言語と文芸』昭四三・七)
- (4) この点については、太田次男氏「白居易文学が生れるまで」(『白居易研究講座 第一巻』勉誠社)、川村晃生氏「歌集論 曾禰好忠集を例として」(『国文学』平六・十一)などに論じられている。
- (5) 好忠の「あま」詠に関する考察は、松本真奈美氏「曾禰好忠『毎月集』について―屏風歌受容を中心に―」(『国語と国文学』平三・九)にある。
- (6) (5)に同じ。
- (7) 漁業関係の資料として渋澤敬三氏「祭魚洞襍考」(昭二九・岡書院)、田辺悟氏「日本鯊人伝統の研究」(平二・法政大学出版会)、『日本史大辞典』(平凡社)、『近江国野洲川築漁業史資料』(日本常民生活資料叢書 第十八巻)などを参照した。地名については、『大日本地名辞書』(富山房)、『角川日本地名大辞典』(角川書店)、『日本歴史地名大系』(平凡社)などを参照した。
- (8) 松本真奈美氏「重之百首と毎月集」(『国語と国文学』平四・十)

に指摘がある。

(9) (8)に同じ。

(10) 「冷泉家本」にはこの二首とも、欠脱している。

(11) ここでは「仙川」を、普通名詞と考えたが、琵琶湖周辺には「仙川」の名を持った河川も複数存在する。

(12) 源順は、天禄二(九七一)年から天元二(九七九)年頃、近江の野洲にいたということが「安法法師集」によって知られる。

前和泉守順の君の、官たまはらで近江のやすのこほりにあるにいひやる

世をうみに思ひなしてやちかつえのやすのすまひに君がゆきけむ
(安法法師集・一六)

〔付記〕尚、本稿は、平成十年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一つである。

(かねこ ひでよ)